

# タブレットを利用した協同的な英語の学習の試み

入江公啓\*1

Email: irie@shigakukan.ac.jp

\*1: 志學館大学人間関係学部

◎Key Words 協同学習, タブレット, 動機づけ

## 1. はじめに

大学における共通科目の英語の授業は、その単位の取得が卒業要件となっている場合が多い。そのため、履修者の中には、英語が苦手な、学ぼうとする意欲の乏しい者も多い。筆者は、協同学習の互恵的相互依存関係を取り入れるとともに、タブレットの利便性を活用することにより、学習に取り組む姿勢をより積極的なものにする試みを行った。本稿では、学生のアンケートを基に授業を振り返り、考察を加える<sup>(1)</sup>。

## 2. 協同学習

### 2.1 協同学習の定義

「協同」で行う学習については、日本語では「共同」「協働」「協調」、英語では cooperation, collaboration という単語が使われており、その定義も使用者により異なっているようである。日本協同教育学会の関田・安永<sup>(2)</sup>は「協同 (cooperation)」という単語を採用しており、次の条件を満たすものを「協同学習」として定義している。

- (1) 互恵的相互依存関係の成立
- (2) 二重の個人責任の明確化
- (3) 促進的相互交流の保障と顕在化
- (4) 「協同」の体験的理解の促進

本稿でも、この基本理念を尊重し、「協同」という単語を使う。ただし、後述するように本稿で研究対象としている学習は、上記の条件をすべて満たしているわけではないので、「協同的な」という表現を採用する。

### 2.2 協同学習の意義

英語の授業の主たる目標は、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り... コミュニケーション能力を養う (中学校・高等学校学習指導要領)」ことである。授業では、ペア活動やグループ活動は広く行われている。しかし、教科書に書いてある会話を読むだけのロール・プレイは協同学習とは言えない。形だけのペア学習は、互恵的相互依存の関係性が低いからである<sup>(3)</sup>。

学生同士が協同して行う活動では、お互いに知識を補い合い、教え合う中で、自分の持っている知識を見つめ直し、その知識をより深く、広くすることができる。また、教えるためには深く、広い知識と相手に分かりやすく伝える能力が必要であり、こうした活動を通じて、その知識をさらに強固なものにすることができる。「教えることは二度学ぶこと」という格言もある。

協同学習は、学習者の動機づけや学習態度の向上にも有効である<sup>(4)(5)(6)</sup>。お互いを認め合い、助け合う環境の中で、学習することの楽しさを体感し、学び続ける意欲が高まる。失敗を恐れず、自分たちで課題を見つけ、積極的にチャレンジすることにより、自律的な学習を行うようになる。協同学習は、学習、教育の本質を問い直すものである。

## 3. タブレット

### 3.1 タブレットの機能

中川<sup>(7)(8)</sup>は、授業に活用できるタブレットの代表的な機能として 11 の機能を例示し、その特徴を次の 4 点に集約した。

- (1) Personal
- (2) Compact
- (3) All in one
- (4) Platform

つまり、タブレットは、学習の様々な場面で活用することのできるツールであり、(1) 個人またはグループのペースによる学習を可能にし、(2) 小さいのでどこでも気軽に利用でき、(3) 複数の機器を使うことなく 1 台ですべての作業を行うことができ、(4) 黒板が担ってきたような学習の場、共有の場になることができるという特徴をもっている。

### 3.2 英語の学習におけるタブレットの利用

英語の学習においては、それぞれの時代の新しい機器がいち早く取り入れられてきた。音声やビデオを視聴するために CD・DVD プレイヤーが使われたり、海外の情報を得て、海外の人々との交流を行うためにインターネット、パソコンが使われたりしてきた。現在最も注目を集めているのは、タブレットであり、その利用の様々な試みが行われている。

奥田<sup>(9)</sup>は、音声認識ソフトで発音を矯正しながら、グループごとにビデオ撮影を行い、YouTube にアップロードする活動を行った。高橋ら<sup>(10)</sup>は、テレビ会議アプリを利用して、海外の学校と交流した。坪田・壇辻<sup>(11)</sup>は、速読用のアプリなどを利用して、長文の英語のリスニング活動を実施した。西垣ら<sup>(12)</sup>は、言語データベースと検索用ソフトを利用して、気づきを引き出すデータ駆動型学習を実践した。

## 4. 方法

### 4.1 参加者

対象となるクラスは共通教育の英語の4科目である。参加者は、主に英語以外を専攻とする1年生と2年生で、合計118名であった。2015年度の前期と後期に実施した(表1)。

表1 クラスの概要

科目	英語Ⅰ	英語Ⅱa	英語Ⅱb	英語B
人数	33	27	30	28
活動	リスニング リーディング	リスニング リーディング ライティング	リスニング リーディング ライティング	リスニング

### 4.2 手順

使用した教材や行った活動は、クラスの目的やレベルによって異なっているものもあるが、いずれもタブレットを利用しながら協同的な英語の学習を行わせた。主な活動の手順は次のとおり。

#### 【リスニング】

- (1) 問題がクラス全体に提示される
- (2) 音声をクラス全体で聞く
- (3) グループごとにタブレットで音声を聞き、問題について話し合う
- (4) グループごとに解答を作り、提出する
- (5) クラス全体に解答、説明が提示される
- (6) グループごとにタブレットで音声を聞き、振り返る

#### 【リーディング(文章理解)】

- (1) 課題がクラス全体に提示される
- (2) グループごとにタブレットで単語の意味を調べながら問題について話し合う
- (3) グループごとに解答を作り、提出する
- (4) クラス全体に解答、説明が提示される
- (5) グループごとに振り返る

#### 【リーディング(発音)】

- (1) 課題がクラス全体に提示される
- (2) 音声や意味の確認をクラス全体で行う
- (3) グループごとにタブレットで音声を比較しながら練習する
- (4) グループごとにタブレットで音声を録音する
- (5) グループごとに(個々に)タブレットで音声を聞き、評価する
- (6) グループごとに教員による評価を受ける

#### 【ライティング】

- (1) 課題がクラス全体に提示される
- (2) グループごとに意見を出し合う
- (3) グループごとにタブレットで単語などを調べる
- (4) グループごとに紙に英文の下書きを書く
- (5) グループごとに英文を完成させ、タブレットを使ってMoodle上に提出する
- (6) クラス全体で全グループの英文を読む

### (7) クラス全体で教員による評価を受ける

1年生のクラスである英語Ⅰ、英語Ⅱa、英語Ⅱbでは、教員が4人1組のグループ分けを行い、授業ごとに交替でリーダー、ノート係、発表係、タブレット係の役割を指定した。活発でないグループもあったので、途中でグループの再編成を行った。一方、2年生のクラスの英語Bについては、友人関係が強いため、教員からのグループ指定、役割指定は行わなかった。2人から5人のグループができ、最初から最後まで同じメンバーで学習していた。

それぞれの授業後にアンケートを行った。協同的な学習とタブレットの利用について4件法(4:そう思う, 3:どちらかといえばそう思う, 2:どちらかといえばそう思わない, 1:そう思わない)で回答を求めるとともに、感じたこと、提言したいことを自由記述で書かせた。

## 5. 結果及び考察

### 5.1 協同的な学習

アンケートの結果は、概ね良好であった(図1)。積極的に参加し、楽しく授業に取り組んでいた。グループで学習することに対しては、肯定的な者が多かった。また、実質的な学習についても肯定的な評価をしていた。分からないことをそのままにするのではなく、教えたり、教えられたりする中で、より深い学習ができたと感じたようである。特徴的な意見として、次のような自由記述があった。

- グループというよりも誰かと協力して問題を解くことはとても良い(英語Ⅱa)。
- みんなと意見を出し合って、文を作ることは難しかったが、後の達成感が嬉しかった(英語Ⅱa)。
- 最初参加しきれなかった子も最後には入ってきてくれた(英語Ⅰ)。
- 英語が出来ない人でも、グループならみんなの力を借りて勉強が出来た(英語Ⅰ)。
- お互い分からないことを確認できたので良かった(英語B)。
- どうして自分はこの答えにしたかといった意見を出し合うことで、よく理解できた(英語B)。
- 人に教えることで、自分も理解が深まった(英語B)。
- 他の人と意見交換により深く学習できると思う(英語Ⅱa)。

一方で、問題点もあった。活動に消極的な学生がいたり、グループのメンバーやグループの編成方法に対して不満を持つ学生がいた。

- 意見を言わない人という人がはっきりわかれていた(英語Ⅰ)。
- 何もしないでいる人がいるのには困った。何でも良いからアイデアを出してほしい(英語Ⅰ)。
- もう少しグループ分けを学力ができる順に振り分けて欲しかった(英語Ⅱa)。
- 無理やり組まないで組みたい人と組ませるべき。その方が意見交換もしやすいと思う(英語Ⅱa)。

このような問題は、英語 B では起こらなかった。協同で学習することについて教員からの働き掛けが一番少なかったが、他のクラスよりも全般的に協同的な学習がうまくいったようである。

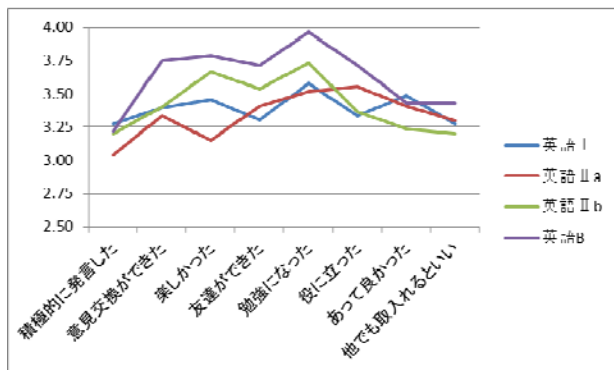


図1 協同的な学習に対する意見

## 5.2 タブレットの利用

アンケートの結果は、概ね良好であった(図2)。大きさ、形が最適で(compact)、リスニング、リーディング、ライティングの全ての活動に対応し(all in one)、グループごとの(personal)学習を進めるツール

(platform)としての役割を果たすことができた。新奇性効果もあったが、タブレットの特長が活かされたようである。ほとんどの学生がスマホを持っており、それで十分という意見もあったが、グループでの活動となると、個人のスマホよりも、グループで共有するタブレットの存在意義があった。特徴的な意見として、次のような自由記述があった。

- リスニングのとき、何回も聞けたので発音が分かった(英語IIa)。
- 手元で発音が聞けるのは良かった(英語I)。
- 単語を調べることができたので、これからも使ってほしいと思った(英語IIa)。
- 今までやったことのない勉強方法だったので、新鮮でよかったですと思います(英語I)。
- Siriを使った発音練習は新しい発見で面白かった(英語IIa)。
- スマホは画面が小さいからグループで使うにはタブレットが良かった(英語B)。
- スマホで十分だったので、タブレットはいらないと思った(英語IIa)。

問題点としては、文字入力がかたくなりにくく、入力した文字が消えるトラブルが多々起こったことである。また、教室の広さにも関係するが、それぞれのグループで音声流すと、隣のグループの音声が邪魔になって聞こえにくいことがあった。

- 文字入力するとき、書いた文が全部消えるときがたびたびあったので面倒だった(英語IIb)。
- リスニングのときに他のグループと重なったりして聞きにくいことがあった(英語B)。

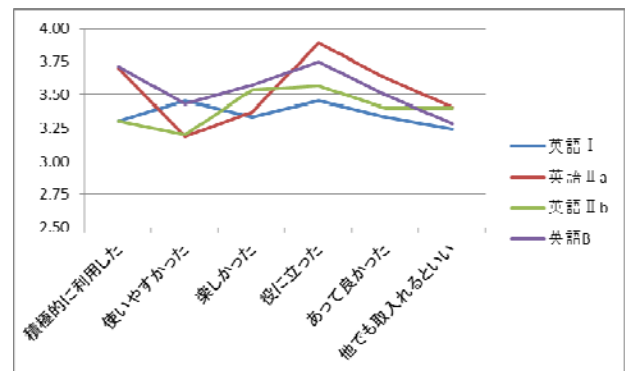


図2 タブレットに対する意見

## 6. 今後の課題

今回の取り組みで最も苦労したのは、協同的な学習に参加させることであった。当初は、黙って見ているだけや、個々に独立して作業をしている場面も見受けられた。グループの役割を指定することにより参加せざるおえない状況にしたり、役割を毎回替えることによりお互いの役割への理解を深めさせたり、グループを再編成することによって新しい関係性を構築させたりしたが、全てのグループにおいて最初から最後まで協同学習が成立したわけではなかった。今後は、グループ全員がそれぞれの特徴を活かしながら参加できるように、多面性と自由度をもったタスクを取り入れることも検討してみたい。

また、技術的な問題にも遭遇した。入力した文章が突然消えるというトラブルが何度か起こった。誤作動によるものなのか、誤入力によるものなのか確定できていないが、今後はタブレットでの英文入力の練習を行わせることも計画している。また、Wi-Fiがダウンするケースもあった。これに対しては、大学全体のWi-Fiを利用するのではなく、教室独自のWi-Fiを構築し、アクセス量をコントロールすることによって対応する予定である。

本研究の目的は、学習に取り組む姿勢をより積極的なものにするのであった。学習の方法や手段を変えることにより、一定の動機づけを行うことはできた。学習の量や深さにも変化が起きたように思われる。しかし、グループで学習するだけでは十分ではない。個々での学習や授業外での学習も極めて重要である。これらのバランスについても今後検討を加えていきたいと考えている。

## 参考文献

- (1) 本研究の一部については、「入江公啓：“タブレットを利用した協同的なリスニング活動”，志學館大学人間関係学部研究紀要，第37巻，pp.85-95 (2016)」で発表した。
- (2) 関田一彦，安永悟：“協同学習の定義と関連用語の整理”，協同と教育，第1号，pp.10-17 (2005)。
- (3) ジョンソン，D. W.，ジョンソン，R. T.，ホルベック，E. J. (杉江修治ほか訳)：“学習の輪—アメリカの協同学習入門”，二瓶社 (1998)。
- (4) 阿川敏恵：“英語学習に対する学習者の動機づけ変化—デジタル・ストーリーテリングを使用した協同学習の試み—”，協同と教育，第6号，pp.90-91 (2010)。
- (5) 大場浩正：“英語スピーキング能力の伸長を目指したイン

タラクション活動における協同学習の有効性”, 協同と教育, 第6号, pp.92-94 (2010).

- (6) 山崎麻由美, 福田昌代: “専門英語教育にグループ制作を取り入れることの学習効果”, 神戸常盤大学紀要, 第8号, pp.85-96 (2015).
- (7) 中川一史: “協働的な学びの成立”, 中川一史, 寺嶋浩介, 佐藤幸江 (編著), タブレット端末で実現する協働的な学び: xSync-シンクロする思考, pp. 11-18, フォーラム・A (2014).
- (8) 中川一史: “21世紀型コミュニケーション力とタブレット端末の活用”, 中川一史, 山本朋弘, 佐和伸明, 村井万寿夫 (編著), タブレット端末を活用した21世紀型コミュニケーション力の育成, pp. 6-14, フォーラム・A (2015).
- (9) 奥田阿子: “iPadを活用した協働学習の試み”, 長崎大学言語教育研究センター紀要, 第2号, pp.45-55 (2014).
- (10) 高橋弘毅, 糟谷理恵子, 近藤美和, 宿院頼, 磯野朋和, 中安隆信, 藤巻小百合, 難波道弘, 三井貴子, 風間重雄: “iPadを用いた山梨英和中学校における教育実践”, 情報処理学会第75回全国大会講演論文集, pp.413-414 (2013).
- (11) 坪田康, 壇辻正剛: “タブレットを活用した英語長文聴解の実施に関する一検討”, 日本英語教育学会第44回年次研究集会論文集, pp.43-49 (2015).
- (12) 西垣知佳子, 横田梓, 小山義徳, 神谷昇, 中條清美: “中学校英語授業における「言葉を観察する眼」を育てるデータ駆動型学習の実践—ペーパー版 DDL からタブレット版 DDL への発展—”, 千葉大学教育学部研究紀要, 第63巻, pp.287-294 (2015).